

## 陶淵明の隱逸について

九二

石川 忠久

### 序

陶淵明の歸隱については諸家種々の説があり、その人間像も『節義に殉ずる慷慨の士』から、『現實を逃避する田舎地主』に至るまで様々である。ただ、彼の残した作品は、彼が所謂超俗の高士であるにせよ、その一面では掩い盡せない性格の多様性を暗示するものが少くないので、由來『白璧の微瑕』とか『臞而腴』とか『不可解な人間』とかの評價が行われている。

私は曾って、「東晉に於ける南人」というテーマで、北來貴族群の玄談の下風に立つ江南土着貴族（曾って吳に仕えた）の様相を考察した時、陶淵明に見られる種々相が、彼も南人貴族であることを認識することによって、すつきりと割り切れそうなることに氣が付いた。淵明は正しく南人である。淵明といえども當時の貴族社會から飛び離れた存在ではあり得ないし、その風潮に無縁ではあり得ない。この觀點から、淵明の作品・傳記資料を、この外側の條件と照らし合わせつつ一つの新たな淵明像をえがいて見た（東大・中國文學研究第二號所收「陶淵明論—南人として見たる陶淵明—」）。小論はその延長としてその隱逸の實相と意味するものとを考察したものであるが、前記假説が前置きに

もなっているので、要旨を記しておきたい。

— 脫俗超世の士という觀念で淵明を見る時、まずひっかかるのは「命子」詩・「責子」詩などに見られる「家」に對する意識の強さである。光榮ある家を繼承するに値しない己の拙さ、子への期待、それが裏切られた歎きなど、達道の土らしからぬ現世への執着が見られる。然しながら、當時の貴族社會に於いては、名聲・榮達・繁榮への欲望が今日の感覺で律することのできないほど強く、又それが常識的でもあつたことを考えれば、淵明に於ける『事の意外さ』は、淵明も又この時代の貴族の一員である以上、寧ろ當り前のこととしなければならぬだろう。

それでは、淵明はどのような貴族であつたかを見るに、陶氏の東晉に於ける位置は陶侃によつて築かれた。侃が淵明の曾祖父であるか否かはともかく、血縁に於いてはそれに相違なく、且つ「命子」詩にも見られる如く侃の存在は淵明の意識の中に重い比重を占めているので、まず侃について少しく見てゆく必要がある。侃は吳の舊臣の出で、微官より身を起し、東晉草創期の武力を必要とする時流に乗つて、官は大司馬、爵は長沙郡公にまで昇り、王導と比肩する功臣たるを自他共に認めた。然し、貴族の格としては、王導・庾亮はもとよ

り、北來一流貴族群の下風に立ち、その侮りすら受けている。侃の死後は、荆江邊に築き上げた勢威が庾氏等の壓迫により大半失われるが、郡公其の他の爵位とともに南人貴族としてまず相當の位置をとどめ得た。淵明はこの侃の非嫡系の一族の一員として生を享けたわけである。若年の頃、儒的教養を積み、自己の才を負い、且つ家の誇りを抱いて官途に野望をもやしたが、早孤という條件もあり（父は恐らく太守どまり）、當人が思うほどには遇せられず、與えられた官は州の祭酒であった。これは儒臭のする南人向きの官であり、客觀的には淵明にとつて、起家年齢（三十歳頃―後述）とも、寧ろふさわしいすべり出しと思われるが、當人は大いに不満としたろうことは想像に難くない。吏職に堪えずとて辭めたが、次に與えられたのが州主簿で一向に變りばえしない。これも斷わる。當時の貴族間に、與えられた官を不満とする場合これを斷わり、次の官を期待する風があったが、淵明の場合も恐らくそういう意圖があつたろうと見る。然し次の官は容易に與えられず、數年の空白の後に鎮軍將軍劉牢之の參軍となり、孫恩討伐に従う（三九七）。實力者に従つて争亂に趨くのは、戦功に伴う封爵の可能性も考えられたが、劉牢之は北地の情勢を氣にして討伐の實は上らない。翌年までは牢之の幕下にいたが、その翌年（四〇一）には桓玄の幕下にいたことがほぼ確實である。當時桓玄は荆・江邊の軍權を掌握した直後であり、帝位篡奪の意圖は露骨に見えていた。劉牢之から桓玄へ移つたのは、桓玄側の帝位を意識した人氣取り策からの呼びかけ（この當時潯陽近邊に淵明の文名が聞えていた可能性は考えられる）もあつたろうが、戦功の期待できない劉牢之よりは桓玄の方が有利であるという判断が淵明にあつたのであろう。桓玄の有する文化的雰圍氣に好感を抱いたからだとか、健康政權の腐敗墮落を救う望みを桓玄に託し

陶淵明の隱逸について

ただとか、更には司馬氏に忠節なはずの淵明が桓玄に就くわけがないから事實ではないとかの説は、いづれも考え過ぎて見當違いと見る。

桓玄に就いたその年の冬、實母の死に遭う。これから次に劉敬宣の參軍になるまで（四〇五）の間、官職の記録がないのは、大部分を喪に服していた爲と解せられる。その服喪の間は東晉王朝の大變動期であつた。元興元年（四〇二）桓玄は健康に入り、劉牢之を降し（後自殺）、翌年安帝を潯陽に幽閉して自立、國を楚とした。ところがこれが當初より不人氣で、まもなく劉裕によつて倒され、三日天下に終る。つまり淵明が喪に服している間に劉牢之は死に、桓玄は人望を失いやがて亡びたのであつた。この情勢の大變化は、官途への有力な手がかりを失い、淵明を失望落膽させたことであらう。そこへたまたま劉牢之の子敬宣が江州刺史となつて潯陽に來たので、この參軍となる。敬宣は父牢之に従つて孫恩討伐に赴いているから、淵明とは當然舊識があつた。ところが、翌年三月安帝復位とともに劉敬宣は宣城内史へ轉出して、又も職を失う。度重なる不運と四十一歳という年齢、一向に昇進しなかつた官歴、ここに至つて恐らく官途への望みを斷ち切らざるを得なかつたろう。その年の八月彭澤の令となる。縣令は収入は多いが格の低い官なので、榮達に望みを持たぬ（持てぬ）者が収入の多きを求めて就く例が多く見られる。淵明の場合、彭澤令就任は名を捨てて（捨てざるを得ぬ）實を取ろうとした、そのあらわれと解せられる。それを僅か八十餘日で辭めたのはなぜか。これは、各史傳に言う「不能爲五斗米、折腰向鄉里小人」という事件がやはり直接の契機になつていると思う。縣は郡に屬するが故にその查察を受ける。その官が督郵でもとより小吏である。その小吏に對し衣冠束帶を整して出迎えるの

は、家の誇りと自負を持ちつつ不本意にも榮達をあきらめざるを得なかつた淵明の心を逆なでするようなものである。而もその小吏が郷里の小人であるに於いておや。

淵明の歸隱に至る事情を、かくの如く一貫した官途への野心の果たされざる失意の末と見做す。もとより山水田園への志向は否定できないが、これは當時の風でもあり、他の文人などにも多かれ少なかれ見られる(例えば謝靈運の場合)もので、淵明の場合を特殊視するほどに強いものとは思わない。言い換えれば山水田園への志向性は歸隱の行爲を直接呼び起すものではない、と考へる。

— 南人が當時の社會に於いて示す傾向を見ると、積極的に北人に依附し榮達を圖ろうとする(車胤・張憑の例)、一藝に秀でて認められようとする(顧愷之の例)、隱逸をはかる(翟湯・謝敷などの例)、の三があり、いずれも、北人の玄談の風に對するに儒的傾向を帯びる。淵明の場合もこの傾向の中でとらえてゆくことが可能であろうと思う。——

以上、「陶淵明論」の要旨を前置きとし、本小論では引き続きその隱逸について一假説を立ててみようと思うものである。まず陶淵明の隱士たる評價に最も大きな位置を占める「陶徵士誄」の作者顔延之との出會いの事情に注目し、當時の社會に於いてのその意味するものを考へ、そこから隱士陶淵明の眞相を考察してゆきたい。

## 一

陶淵明と顔延之の間には、顔作「陶徵士誄」(以下、顔誄と略稱す)があり、兩者の結びつきの尋常でないものが暗示される。この誄は文選にも録されており、淵明に直接に接した人物の残した記録として、資料中甚だ重き位置を占めるのは言うまでもない。沈約宋書や梁昭明太

子「陶淵明傳」(以下、蕭傳と略稱す)が、すでに淵明歿後六十〜八十年のものであり、従つてこれら及びこれ以後の資料に於ける淵明像のなりの部分が、顔誄を基とする可能性も大いに考えられる。故に兩者の交游と顔誄の成立との經緯を考察することは大きな意味をもつてくると思われる。

まず、陶・顔交游の實情はどのように記録されているかを見る。宋書九十三陶潛傳に、

顏延之爲劉柳後軍功曹、在潯陽、與潛情款、後爲始安郡經過、日造潛、每往必酣飲致醉、△臨去留二萬錢與潛、潛悉送酒家、稍就取酒、

とある。蕭傳及び南史本傳には△印の間に、

(江州刺史王)弘欲要延之一坐、彌日不得、

という句が挿入されている外は、殆ど同文が載せられている。晉書には兩者の交渉の記録はなく、而して顏延之の側の資料には陶淵明に關する記録は何もない。

さてこの記事から、(一)顏延之が劉柳の功曹として潯陽に赴任して來た折、初めて識り合つた、(二)後、顏延之が始安太守となつて赴任の途中、潯陽に立ち寄つて交歡した、という事情が知られる。

(一)について細かく見る。劉柳が江州刺史となつたのは義熙十一年(四一五)で、翌年六月には死んでゐる(晉書九安帝紀による)。顏延之は宋書本傳に據れば、義熙十年頃、後將軍吳國內史たる劉柳の下に行參軍(南史本傳には主簿)として起家しており、劉柳の轉出に隨つて潯陽に來たものと思われる。そして、翌年八月、中軍將軍となつた豫章公世子(劉裕長男義符、後の少帝)の行參軍となつてゐるので、十二年後半には府主劉柳の死去に伴い潯陽を離れたことがわかる。従つて、

顏延之の潯陽滯在は義熙十一・二年の間、約一年ということになる。(一)について。宋書本傳により、顏延之が始安太守(治は廣西省桂林)になったのは、宋少帝景平元年(四三三)と知られる。八年目の邂逅であった。この度は赴任の途中であるから期間はごく短かい。

ところで、両者が初めて識り合った義熙十一年という年は、淵明にとつては歸田後すでに十年を閲し、隱士たる名が潯陽周邊に漸く重くなつて來たと思われる(それ故顏は陶を識つたものである)頃であるのに對し、延之の方は仕官したての少壯時代である。兩者の年齢は陶五十一歳に對し、顏三十二歳。この境遇の差と交遊期間の短かさを考え合わせると、兩者の間に普通の意味の交友關係は寧ろ考えにくく、而して友情の趨くところとして後に誅を書くに至つたと單に片付けられないものがあるように思われる。

私は兩者の間にもつと現世的な要素を見出そうとするものであるが、まず當時の風潮よりして陶淵明の隱士たる位置を考察する。

## 二

元來いつの世に於いても、世俗の富貴榮達より超然たる人物は、高尚の士として世の尊崇を勝ち得てきたが、殊に西晉以後の貴族社會に於いては、高踏の風を裝う反面、現世に執着する傾向が支配的であつた爲、官職―顯貴と富の據りどころ―を捨てて自適することは有り難く、従つてかかる行爲をなし得る人物には、いよいよ聲望が集つた。西晉以後、皇甫謐をはじめ數多くの高士傳が編まれ、正史に初めて逸民傳・隱逸傳が設けられるようになったのも、この傾向を如實に反映する。

東晉中期以後、殷浩や謝安の如き山野に自適した人物が、世の要請

陶淵明の隱逸について

によつて樞要の地位を占めてより、かかる生き方を善しとする風はますます強まつた。美麗な山水に恵まれる江南の土に移つて一・三世代、漸くその風土に馴染んできたのも、これに拍車をかけたのは言うまでもない。山水の間に風流な遊びをしたり、山林に隠れる人物をたずねたりすることが、自己の政治的・社會的不滿をはらす手段となつたり、またかかる行爲によつて名聲を得、將來に利せんとするようない動きも、上流貴族の間にあらわれてくる。すると、上流層のかかる風を迎え、その相手をつとめる隱士の態度をとり、名聲を得ようとする者も、また出てくるのであつた。かの蘭亭の集いに有名な、王羲之・謝安と、これを圍繞する孫統・孫綽兄弟・許詢・沙門の支遁などの關係がその典型的な例とならう。<sup>(6)</sup>結局、山水に親しむ全體的な風潮の中に、隱士の傾向をもとうとする者と、それを求めようとする者との、双方互に他を利とする動きが次第に顯著になつてくるのであつた。後には、時の求めに應ずる爲に作爲的に山野に隠れ、露見して流罪になる極端な例まで出てくる。<sup>(7)</sup>

このような風潮が彌漫して行く中に、東晉末期には、新興軍閥勢力の抬頭に伴つて、更に「招隱の風」が新たに見られるようになる。元來新たな王朝が開かれる時には、隱士がその王朝の徳を飾る道具として用いられる例が多くある。廣く野に隠れた士にも德澤が及ぶ、天子の徳に感じて隱士が世に出てくる、という體裁を整えようとするものである(九九ページ王弘之傳に見えるのもその例)。次の例は桓玄が楚を號した時、偽の隱者をこしらえてまで王朝の體裁を飾ろうとしたものである。

(桓)玄以前世皆有隱士、耻於已時獨無、求得西朝隱士安定皇甫謐六世孫希之、給其資用、使隱居山林、徵爲著作郎、使希之固辭

不受、然後下詔旌禮、號曰高士、時人謂之充隱、△資治通鑑晉安帝元興二年十月▽

この話は色々興味ある問題を含んで居り、以つて當時の様相をうかがうに足る。

桓玄を撃ち破つた劉裕も、やがて朝權を掌握するや隱士を招くのであつた。

高祖北討、世子居守、迎(周)續之館于安樂寺、延入講禮、月餘復還山、江州刺史劉柳薦之、△宋書九十三周續之傳▽

帝位篡奪を目論んで、己の聲望を決定的にせんものと北征を企てた折、その留守に世子の爲に隱士を招いたのである。この風は宋朝創立後も(元嘉の中頃まで)引き續き行われている。今試みに宋書隱逸傳を見れば、傳中の人物凡て十八人の中、十四人までが、晉末宋初に隱逸を以つて辟召を受けている者である。これは取りも直さず、當時いかに隱士が重んぜられた(従つて多く出た)かを物語る。上にこの風あれば、下州郡の長官に至るまで(前引の劉柳の如く)、それに順う動きを見せるのは當然である。

陶淵明は正しくこの時代の隱士である。その歸隱に到る経緯からしてすでに彼が單なる世捨人ではないことが考えられたが、如上の觀點からすれば、その隱逸の意味も積極的にとらえなければならぬこと(は)ほぼ了察されよう。彼の詩の中に、隱退後の交游を示す贈答・應酬の作が少くないことも、思い起されねばならない。

### 三

陶淵明と顏延之の結びつきの意味をさぐるために、次に顏延之の側の情況を見ておく必要がある。

顏氏は瑯琊臨沂の人。魏の青州・徐州刺史であつた顏盛以前のこと不明である。世説尤悔篇に、西晉の初の頃太原の王氏と婚姻を結んだ顏氏の女が對等の扱いを受けなかつた話が見えるが、當時の顏氏の家格を知る材料とならう。盛以後は代々郡太守程度で終り、曾孫含に至る(以下附圖参照)。含は兄に仕えて孝友の譽あり、州の辟召を受けだが就かず、やがて時の實力者東海王司馬越の參軍となる。ついで瑯琊王司馬睿が下邳に鎮するや、その參軍となり、極めて早い時期に過江している。なお注目すべきことは、含の叔母が瑯琊の王會に嫁して居り、王舒は外弟になり、従つて王導・王敦とも兄弟のすじに當るのであつた。王氏と顏氏は郷貫を同じくすることも注意される。この王氏との關係が、後述する延之の對王氏親近感の根底に意識としてあつたらうと思われる。

とにかく、過江以前に結ばれた婚姻關係が、江南に於ける豫期せざる王氏の權勢によつて、含が東晉貴族社會に地位を占めるのに有利にはたらいいたことは想像に難くない。建武中興の際、儒素篤行を以つて召し出され、九十三歳の長壽を保つて右光祿大夫にまで升つた。然し、そもそもが孝友によつて知られ、儒素を以つて重んぜられたことでもあり、又異數の榮進に却つて處世に氣を配つたりした(姻戚には盛族をことさらに避けた、と晉書本傳に見える)ため、地味な二流貴族という位置に止つている。含の三子は、長子髦が光祿勳となつた外、謙・約は太守に終つている。約の子顯は護軍司馬で早世、その子が延之である。従つて、含によつて築かれた家格は延之の代には、非嫡系でもあり、更に低下していったことが類推される。現に宋書本傳に「延之少孤、貧居負郭、室巷甚陋」と言う。三十歳まで結婚せず官職にも就いていない。

次に注目すべきことは、東莞劉氏との姻戚關係である。延之の妹が劉穆之の子憲之に嫁している。劉穆之は自稱漢齊悼惠王肥の後裔とのことだが、これは劉裕が漢楚元王交の後裔と稱するのと同様、この馬の骨だかわからないのが實情である。代々京口あたりに住み、素浪人時代の劉裕と相識っていた。はじめ江歎（建武將軍瑯琊内史）に知られ主簿となっていたが、劉裕が建武將軍下邳太守になるに及び（四〇一）、昔のよしみで引かれて主簿となった。以後劉裕の腹心の參謀として活躍、十年ほどの間に丹陽尹・尚書左僕射と升り、南康公の爵位までも得た、典型的な成り上り者である（義熙十三年に病歿）。

顔と劉の結びつきは、恰も劉裕一族が王・謝等の一流貴族と姻戚關係を結んだのと同工にしてその小型なるもの、と見ることができよう。劉穆之は丹陽尹の時、延之の才を認めて召しかかえようとするが、延之はこれを断っている。新興勢力との結びつきに利を得つつも、起家官には慎重な態度がうかがわれる。そして、義熙十年、後將軍吳國內史の名流南陽の劉柳に就き參軍となったのである。

以上、顔延之がどのような貴族であるかを見た。之を要するに、顔氏は西朝以來の舊族ではあるが、東晉に於いて尙二流たるに止まり、延之の代には更に低下して居り、孤貧という條件も加わる。新興勢力と結びついたのも恐らくこの爲だろう。三十歳という年齢と前述の起家官はまず相應のものと言えよう。

恰も世は混亂の様相を呈して居り、家門を恢復し更に顯貴へ升る絶好の機會である。延之は己の才能をたのみ相當の野心を抱いて仕官したことであろうが、褐を劉柳の府に解いたことを後悔していることが注目される。宋書本傳に、元嘉の頃侍中として時めいていた劉湛（柳の子）に向つて、

吾名器不升、當由作卿家吏

と毒づいているのが見える。この短い語句の間に、榮達の野心に燃える延之の、それ故の失意と反感が讀みとれるであろう。理由はとにかく、榮達を阻害されたという意識は、當時の貴族にとつてかなり重大な意味を持つと見なければならぬ。これが、次に述べる對王氏への接近の契機となり、ひいては陶淵明と結びつく一つの素因ともなつたと見る。

#### 四

引續き顔延之の側の情況として、瑯琊王氏に對する親近の狀を見てゆくこととする。

前章に述べた如く、かなり遠い關係ながら王氏とのつながりはあり、その意識は相手が超一流であるだけに延之に於いて強いものがあつただろう。記録に見える近接の實狀は劉柳死後の義熙十二年（四一六）にはじまる。

すでに第一章に述べたが、劉柳死後、顔延之は豫章公世子中軍將軍府に遷つて居るが、この府は十二年八月に開かれたことが宋書武帝紀に見える。府主劉義符は當時十一歳、この幼主を輔佐して事實上府事を主宰したのが長史（六品―杜佑通典職官晉官品表による、以下同じ）の王惠（三十二歳）で、功曹（七品）に王球（二十四歳）が居り、共に瑯琊王氏の嫡々である（附圖參照）。而して延之（三十三歳）はこの下に行參軍（八品）となつたのである。この關係は、豫章公世子が宋公世子を経て宋國太子となつても暫く續く。殊に王球とは、球が世子中舍人の時延之は世子舍人、太子中舍人となると太子舍人となり、その後も球が太子右衛率から侍中となり中書令となると、延之は中書侍郎・太子

中庶子となるという具合に、かなりの期間直接の上下僚の關係が續いた。宋書顏延之傳に、

中書令王球名公子、遺務事外、延之慕焉、球亦愛其材、情好甚款、という。王球に特に目をかけられたことがわかるが、これを上下僚の關係と考え合せれば、顏延之が王球に積極的に近づき、王球が顏延之を引いた、という事情が了察される。尙、兩者の結びつきの間に、「遺務事外」という要素があることが注意される。なお、王球（字無し）の後を嗣いだ王奐（球の從孫）に對して次のように言うのも、顏延之の球一家への親近を表わす。

奐諸兄出身諸王國常侍、而奐起家著作佐郎、瑯琊顏延之與球情款稍異、常無奐背曰、阿奴始免寒士（南史二三王奐傳）

王氏との親近關係を示す主要な例として、延之の死後、その祭文を王僧達が書いている（文選卷三十）ことが挙げられる。尙、兩者には贈答の詩がそれぞれ一首ある（同卷十三）。王僧達は王弘の少子で、顏延之より若きこと四十歳、故にこの兩者の結びつきの背後に寧ろ王弘との緣故が暗示される。義熙十二年春、豫章公から宋公に升った劉裕に（北征中）祝詞を言上すべく使した延之と入れ替りに、翌年劉裕に九錫を賜うべく洛陽から建康に壓力をかけて赴いたのが王弘（當時太尉左長史）であつたことも、關係を推測するに資する。王弘との緣故は陶淵明と王弘との挿話（後述）を考へる場合の材料となる。

その他、瑯琊王氏としては傍系に屬するが、王弘之の誅を顏延之が書こうとした話（宋書九十三王弘之傳）、劉湛と同時の侍中殷景仁・王華・王曇首の四人のうち、劉・殷のみを悪く言うこと（顏延之傳）、なども顏延之の對王氏親近感のあらわれと見ることができよう。

瑯琊王氏は中興の祖王導歿（三三九）後、潁川庾氏・譙國桓氏・陳郡

謝氏・太原王氏、それに王室一族の司馬氏などの勢力に押されて稍退潮を示し、それが却って幸いして東晉末期の政變を切り抜け得て居り（庾・桓・王・司馬は殆ど消滅）、劉裕に近づくのもまた早かった。晉書六十五王謐傳に、

初劉裕爲布衣、衆末之識也、惟謐獨奇貴之、常謂裕曰、卿當爲一代英雄

と言う。王謐は王導の嫡孫にして一族の宗であつた。この話は後からこしらえたものではあるが、劉裕にいち早く近づこうとした様子は了解される。當時の上流貴族はどの軍閥に就くかで運命が分かれる故、方々に氣を配つて保身をはかる例が多く見られる。王謐などは桓玄や劉毅にもはさまれて右往左往する始末である。謝氏一族の宗謝渥は劉毅に就いて失敗した例となる。とにかく王氏は、王弘や王惠・王球の例にも見る通り、劉裕軍閥に早く密着してうまく立ちまわり、新王朝にも引き續き一流貴族の筆頭たる地位を占め得ている。

かく見てくると、劉裕政權に接近する一流貴族王氏、王氏に接近する二流貴族顏延之の姿が明瞭となる。

## 五

次に陶淵明と顏延之との結びつきに、軸として介在する一つの問題、周續之をめぐる事情を見てゆく。

宋書顏延之傳に、

雁門人周續之、隱居廬山、儒學者稱、永初（四三〇—二）中、徵詣京師、開館以居之、高祖親幸、朝彥畢至、延之官列猶卑、引升上席、上使周續之三義、續之雅仗辭辯、延之每折以簡要、既連續續之、上又使還自敷釋、言約理暢、莫不稱善、

とある。朝彦の面前で顔延之は周續之を論破したのだが、第二章に引いたように(九四ページ参照)、この周續之を中央に推薦したのは劉柳である。第三章で述べた顔延之の劉柳に對する感情を思えば、この事件は單に延之の學才を誇るものと見るにとどまらず、劉一周のつながりに對立する積極的な態度をうかがうことができるだろう。すなわち、劉柳に面白からぬ感情を抱く顔延之が、後に劉柳の推薦した潯陽の隱士周續之を論破した、と。そしてこれは、顔延之が潯陽に棲む別の隱士陶淵明に結びついた一つの理由を説明するものと考えるのである。

周續之は宋書九十三本傳によれば、十二歳の時、當時豫章太守の范甯が立てた郡の學校に入り、甯に業を受けること數年、五經並びに緯候に通じ、范甯門下の顔子とうたわれた。劉毅が姑熟に鎮した義熙元年(つまり淵明が歸隱した年)、その辟召を受けたが就かなかつた。恐らく劉毅に付くの不利益を見たものであろう。かなり早くから隱士の名が潯陽周邊に通っていたものと見える。劉柳に推薦された後もしばしば朝廷に招かれているし、次の江州刺史檀韶にも招かれている。賣れつ子の隱士とでも言うべき存在であつた。

尙、范甯は晉書七十五本傳によれば豫章太守の時、郡の學校に不相應な大規模なものを興したかどで、直接上司たる江州刺史王凝之(瑯琊王氏、羲之の子)の彈劾を蒙っている。(そしてこの王凝之の江州刺史の時、陶淵明は江州祭酒として起家しているので、祭酒という職掌柄、この事件に關係した可能性も考えられる。)又、太原王氏の嫡々王國寶は甯の甥に當る。これらの事柄も、范一周の關係が密接なだけに、瑯琊王氏に親近する顔延之の對周感情にはたらいっていると考えられよう。更にここで、潯陽に於ける、劉一周、(太原王氏)——范一周の系列に對するに、

陶淵明の隱逸について

瑯琊王氏——顔陶の系列、という見方も可能であろう。

陶淵明の側にも周續之に對立する感情を示す詩があつて、その見方に資する材料となる。「示周續之・祖企・謝景夷三郎」という詩がそれである。これは、劉柳の後義熙十二年の後半から十四年の前半まで江州刺史であつた檀韶が、この三人を招き潯陽城北に於いて講禮せしめた時のものである。内容に問題もあるので詩を掲げる。

- |          |                             |
|----------|-----------------------------|
| 1 負痾頽簪下  | 痾 <small>まよ</small> を負ふ頽簪の下 |
| 2 終日無一欣  | 終日一欣無し                      |
| 3 藥石有時閒  | 藥石時有りてか閒に                   |
| 4 念我意中人  | 我が意中の人を念ふ                   |
| 5 相去不尋常  | 相去ること尋常ならず                  |
| 6 道路遑何因  | 道路遑として何にか因らん                |
| 7 周生述孔業  | 周生孔業を述べ                     |
| 8 祖謝響然臻  | 祖謝響然として臻る                   |
| 9 道爽向千載  | 道爽はれて千載に向とし                 |
| 10 今朝復斯聞 | 今朝復た斯に聞く                    |
| 11 馬隊非講肆 | 馬隊講肆に非ざるに                   |
| 12 校書亦已勤 | 校書亦た已だ勤めたり                  |
| 13 老夫有所愛 | 老夫愛する所有り                    |
| 14 思與爾爲鄰 | 爾と鄰と爲らんことを思ふ                |
| 15 願言誨諸子 | 願はくは言に諸子に誨へん                |
| 16 從我頽水濱 | 我に従へ頽水の濱に                   |

祖・謝については知る所がないが、この詩によつて見るに、周に附



隨する者の如くである。

この詩の解釋については、周等に對する「冷譏」とするもの、講禮の美學を「稱讚」とするもの、の正反對の二つの見かたがある。前者は、題の「示」の字や、殊に15・16の二句の調子を據り所とし、李公煥はじめ多くの注釋家の采るところとなつてゐる。後者については、4・14句あたりの表現が諷刺にしては「語意真切」と見る張潮等の意見があり、近くは鈴木虎雄博士の積極的な説がある（『陶淵明詩解』八昭和二十三年、弘文堂刊）。15・16の二句について鈴木博士は、「諸子」を淵明の子達に、「潁水」を柴桑を流れる斜川に解し、「どうぞ我が斜川あたりの小川に近く住まわれて、我が諸子に教誨を垂れられよ」とするが、やや無理ではないだろうか。やはりこれは當り前に見て、「周等の俗に迎合する態度を嘲けり、我が生き方にならえ」とする方向の解釋が妥當と思う。私はこの詩に、もっと積極的な「周等に對立する意識」を見る。7から12に至る六句は、専ら周等が儒學を以つて世に迎えられることを皮肉るものと受けとれ（殊に11・12の調子）、更にここに六句費してゐることが、この詩に、單に我にならえとするよりもっとしつこい「相手に對する意識」を感じしめるものとなつてゐる。かく見てくると、「語意真切」と見える4・14や、5・6なども却つて揶揄・皮肉の意に自然に受けとれるのである。

つまり、この詩を、前述の事情を反映する好資料と見るのであるが、この詩について更に推測するなら、儒學の素養では周續之に及ばない陶淵明が、こっちは詩でゆくぞ、という意味を持つ作と見る。

以上、東晉末期の風潮を背景にした陶淵明と顏延之の雙方の事情を考察し、兩者の結びつきの意味をさぐるうとした。ここでこれをま

めつつ推論を試みたい。

義熙十一年、顏延之の潯陽赴任を機として生じた兩者の交游の背後には、

(A) 顏延之の側に、反劉・親王の立場から、劉柳の推す周續之とは別の隱士として陶淵明を認め、これを稱揚し中央に紹介せんとする意圖があつた。

(B) 陶淵明の側に、同じ潯陽の隱士たる周續之に對する反感があり、顏延之の存在を好都合とした、という双方が他を利とする（顏延之の方に積極性があるが）要素を見ることが出来る。つまり、歸田後十年、潯陽周邊に漸く隱士の名が知られてきた存在ではあつたが、隱士としては依然續之の下風に立つ陶淵明を、仕官したての少壯顏延之が、當時の貴族社會の功名場裡に己の立場を有利にせんとする手だての一つとして、中央に紹介する役割りを果たした、と見る。次に述べる「著作佐郎不就」問題もこれに關連して考えるものである。

顏延之が陶淵明の隱逸の名に於いて果たした役割は、後年彼が元嘉の朝に文壇の領袖たる重き地位を占めたことによつて、非常に大きなものとなつたと考えられる。若年の頃のこのつながりから残された諒が、後來の名聲の爲に不動の位置を占め、ひいては陶淵明自體の存在をも不動のものとした、という想定も可能ではなからうか。

## 六

陶淵明が著作佐郎を授けられて就かなかつたことはどの史料にも見えるが、この意味するものを考察し、更に江州刺史王弘と陶淵明の間の事情を推測する。

まず宋書本傳を見るに、

義熙末、徵著作佐郎不就

とある。顔詠には「義熙末」という記述はなく、漠然と晩年のことのように記しているが、元來歴史記述ではないのだからこのような書き方をとったものであろう。南史は宋書を踏襲する。蕭傳と晉書は歸田後間もないような書き方をしているが、縣令を辭めて間もなく著作佐郎ということの不自然さ（後述）もあり、雑な書き方と言える。また、著作佐郎と著作郎（顔詠）の官職名の相違は、實體は同じものを指すので、問題ない。

歸隱後十數年にして、ひよっこりと陶淵明に授けられた著作佐郎の官はいかなる意味をもつものか。そもそも著作佐郎は秘書省に屬し、朝廷の文事にたずさわるを職とするが、東晉以後に於いては、一流貴族の子弟の起家官として秘書郎に次ぐ位置を占める清官となり、起家官に非ざる場合は概ね二流貴族の文筆を以って聞える者に與えられている。謝沉（晉書八十二）、徐廣（同上）、伏滔（同九十三）、孫綽（同五十六）などの例がそれである。ところが晉宋の交になると、國子博士や散騎侍郎・常侍などと同じく、隱逸を以って聞える者に與えられる官となつてきている。（孫綽や伏滔の場合も隱逸の傾向が強いが。）第二章で擧げた皇甫希之の例はその典型的なものとならう。なお二・三の例を擧げる。（いずれも劉裕執權以後、宋初に至る例）

○孔淳之字彥深、魯郡魯人也、…居會稽剡縣、性好山水、每有所游、必窮其幽峻、或旬日忘歸、…除著作佐郎、太尉參軍並不就、  
（宋書九十三、以下の例皆同じ）

○翟法暘、潯陽柴桑人也、…立屋於廬山頂、喪親後、便不復還家、不食五穀、以獸皮結草爲衣、…州辟主簿、舉秀才、右參軍、著作佐郎、員外散騎侍郎、並不就、

○王弘之字方平、瑯琊臨沂人、…家貧而性好山水、…除員外散騎常侍、並不就、…從兄敬弘爲吏部尙書、奏曰、聖明司契、載德惟新、垂鑑仄微、表揚隱介、…前員外散騎常侍瑯琊王弘之、恬漠丘園、放心居逸、前衛將軍參軍武昌郭希林、素履純潔、…臣愚謂弘之可太子庶子、希林可著作佐郎、即徵弘之爲庶子、不就、  
○宗彥之字叔榮、南陽涅陽人、炳從父弟也、…雖文義不逮炳、而眞澹過之、…高祖受禪、徵著作佐郎、不至、…告人曰、我布衣草萊之人、少長壟畝、何枉軒冕之客、…

これらの例を見れば、著作佐郎は文義を主とするよりも、隱逸を以って聞える者へ授けられる官となつてることが明瞭となる。（家格や關歴の關係で、散騎侍郎・常侍・太子庶子のような一段高い官を授けられることもある。）而も、これらの官はいずれも就かないのが例となつている。これも桓玄―皇甫希之の例に典型的に見える如く、授ける方は相手が就くことは期待していない、というより就いたらおかしなことになるわけである。だから、著作佐郎を授けられたという事は、いわば「王朝公認の隱士」なるお墨付をいただいたことを意味すると見ることが出来る。

かくの如くして、陶淵明の「著作佐郎不就」も例外たり得ないと考える。

また、「義熙末」を文字通り十四年とすれば、王弘との關係がここで考えられてくる。王弘はちょうどこの年、檀韶が免ぜられたのに代つて江州刺史となつている（宋書四十二王弘傳、前官は尙書僕射）。中央にいた時、陶淵明のことはあらかじめ顔延之に直接、又は王氏一族を通して間接に聞き及んで居り、江州刺史として赴任すると、早速これを稱揚し朝廷に具申する、ということとは、王弘と劉裕との特殊關係

(九六ページ参照)及び當時の風を迎える王弘の性格を考慮に入れると、十分可能性があると思う。あたかも顔延之は潯陽から歸つて後、豫章公世子中軍行參軍、太學博士、世子舍人と遷りずつと都にいた(義熙十二年〜十四年)。この沙汰にかけから盡力した可能性も考えられる。

之を要するに第五章の推論に續き、義熙十一年以後顔延之を媒介として隠士たる陶淵明の名は中央に知られはじめ、十四年に至つて王弘の直接のはたらきかけで王朝に認められた隠士となった、その中間に經緯の一端を示す「示周・祖・謝三郎」詩がある、と以上のような想定を爲すものである。

七

ここに注意を惹くのは、王弘と陶淵明の交渉を示す宋書陶淵明傳の次の挿話である(他の史料も略同じ)。

江州刺史王弘欲識之、不能致也、潛嘗往廬山、弘令潛故人龐通之齋酒、具於半道栗里要之、潛有脚疾、使一門生二兒舉籃輿、既至欣然、便共飲酌、俄頃弘至、亦無忤也、

この挿話の中の淵明は、いかにも脱俗不羈の世捨人の様に描かれるが、酒を釣る道具にすること、廬山へ行く途中だなどということに、作りものの臭を感じる。『陶淵明らしい』ところが却つて疑わしい。

果して陶淵明はこのような世捨人であつたらうか、又王弘との交渉はこんな奇妙なものだつたらうか。淵明が單なる世捨人ではないことは、序及び第二章で述べ、それを裏づける淵明の側の資料の一として、歸隱後の州縣の役人との贈答詩がかなり残っている(十數首)ことを挙げた。その中の一つに「於王撫軍座送客」(王撫軍は即ち撫軍將軍江

州刺史王弘、李公煥注に永初二年人四二二Vの作とす)というのがある。

秋日淒且厲	秋日淒にして且つ厲なり
百卉具已腓	百卉具に已に腓む
爰以履霜節	爰に霜を履むの節を以て
登高餞將歸	高きに登りて將に歸らんとするに餞す
寒氣冒山澤	寒氣山澤を冒し
游雲倏無依	游雲倏ち依る無し
洲渚四緬逸	洲渚四に緬逸たり
風水互乖違	風水互に乖違す
瞻夕欣良讌	夕を瞻るに良讌を欣ぶ
離筵聿云悲	離筵聿に云に悲し
晨鳥暮來還	晨鳥暮に來り還る
縣車斂餘暉	縣車餘暉を斂む
逝止判殊路	逝と止と殊路を判ち
旋駕悵遲遲	駕を旋し悵として遲々たり
目送回舟遠	目送す回舟の遠きを
情隨萬化遺	情は萬化に隨つて遺る

典型的な送別詩である。この客は謝瞻と庾登之であるとする(文選卷十に「王撫軍庾西陽集別、時爲豫章太守、庾被徵還東」という謝瞻の詩があるによる)のが李注以後普通であるが、それはともかく、この王弘の座に於ける、當り前の送別詩が一首存するということは、淵明がごく自然にこの種の宴席に連つていたことを思わしめる。私としては、第五章で述べた如き王氏―顔延之―陶淵明の系列をも考慮に入れると、

淵明が王弘の座に連るのは寧ろ自然に受け取れる。(王弘によって) 王朝に認められる存在となった隠士陶淵明が、(刺史の座をほじめ) 折々の送別などの公讌に招かれて座に高尚味を添える役割りを果たした、というふうだ。

だから、先ほどの挿話が虚構でないとするなら、王弘側が(善意に) 仕組んだ筋書きかもしれない、と考える。わざわざ隠士をこしらえる話もあるぐらだから、朝廷にその隠逸ぶりを喧傳せんが爲に、典型的な脱俗の風を自分との間にえがき出して見せようとした、というのも王弘にありそうな事柄である(通隱と言われる周續之に對して、こっちは本物だぞ、という意圖もこれにはたらいたかもしれない)。

この挿話にあらわされる王弘對淵明の世俗對脱俗の對比は、後の記録ほど誇張されるようである。注⑩に引いた如く、寧ろ脱俗の氣味さへ帯びる王弘がいよいよ俗物となつて傳えられる。第一章で引いた顔延之と淵明との二度目の邂逅の際の記録に、宋書にはない「弘欲要延之一坐、彌日不得」なる語が、蕭傳、南史に挿入されているのも、その一例となる。これには顔延之までが王弘に對してえがかれ、淵明の脱俗に一役買っている。晉書を見るとこの傾向は顯著にあらわれる。宋書にくらべて分量が三倍ほどになっている。比較の爲に當該部分を掲げて見よう。

刺史王弘以元熙中入義熙末の誤り、臨州、甚欽遲之、後自造焉、  
潛稱疾不見、既而語人云、「我性不狎世、因疾守閑、幸非潔志慕  
聲、豈敢以王公紆軫爲榮邪、夫謬以不賢、此劉公幹所以招誘君  
子、其罪不細也、」弘每令人候之、密知當往廬山、乃遣其故人龐  
八胤の誤り、通之等齎酒、先於半道要之、潛既遇酒、便引酌野亭、  
欣然忘進、弘乃出與相見、遂歡宴窮日、潛無履、弘顧左右爲之造

陶淵明の隱逸について

履、左右請履度、潛便於坐申脚令度焉、弘要之還州、問其所乘、  
答云、素有脚疾、向乘籃輿、亦足自反、乃令一門生二兒共轡之至  
州、而言笑賞適、不覺其有羨於華軒、弘後欲見、輒於林澤間候之、  
宋書の話は皆あり、その一つ一つが細かい修飾を加えて引き延ばされて  
いる外、もとの話にないセリフが長々と述べられたり、履の話(續  
晉陽秋に基づくとと思われる)が加わったり、脚疾の爲にかごに乗った話  
に華軒を羨やまない意味を附加したりしている。もっとも奇妙なのは  
最後の部分である。王弘が淵明に會いたい時はいつも林澤の間で待つ  
ていたというのだ。

この他、蕭傳に見える檀道濟とのやりとり、宋書其の他に見える無  
絃琴を撫する姿、顔延之の與えた二萬錢の酒代の話、廬山記に見える  
虎溪三笑、蓮社高賢傳にいう慧遠や蓮社との關係等、淵明晩年の挿話  
として傳えられるものは、すべて淵明の隠士たるを強調、誇張するも  
のと見るべきである。こうした話が後から次々に加わり、高士傳など  
に見られる古の隱者のタイプ、世の常とする秩序を無視し、被髮して  
山中に木の實を食らい、人里にその變つた姿を時々あらわす、式の奇  
矯さの方向へ傾むくのも、かかる隠士・高士に憧がれる人々の願望の  
爲せるわざで、淵明はその代表として偶像化の過程を辿ったものであ  
ろう。淵明に直接つながる顔誅では、その誅文(しかも徵士の誅)とい  
う性質上、又顔延之の立場上、隠士たるの陶淵明を稱讚し誇張するが  
(従つて前述の方向への傾きを内包するが)、實際そこに描かれるのは常識  
的な人間の範疇を出るものではない。

ただ、淵明自身、對人關係に於いて意識的に、自己の隠士たるを以  
つて處世したろうことは當然考えられる。「贈羊長史」では、商山の  
四皓の跡を訪れてくれ、ということによって自分の隠士たるを主張

し、「答龐參軍」では、「我實幽居士」と表明しているが如き、その顯著なあらわれである。従つてその間に世の常と異なる高さを示す行爲が（前述の挿話のたねとなるような）淵明の側にもあったと思う。隱逸や清貧ゆえの名聲であれば、かかる處世態度は持續、更には發展されなければならぬ。然し、だからと言つて、これは作爲として受けとられたりするようなものでは、勿論ない。いわばどういふ處世を認める見方が、隱士を遇する側にも隱士の側にもあつて、何ら不思議に思わぬ、當時の社會通念と言つてもよいだろう。隱士といへどもあくまでも貴族社會の中でのもので、常に對社會的意味を持つのである。もしここから外へ出れば、それはもう隱士ではなく、ただの木樵である。「樵隱俱に山に在りて、由來事同じから」ざる所以である。

たとえば宋書九十三隱逸傳に見える翟法賜は、曾祖湯（晉書九十四隱逸傳にあり）、祖莊、父矯と四代續いた隱士である。翟湯傳を見るに南山にかくれたりしているが、一方鬱然たる豪族の如く地方に振舞つてゐる様子もうかがわれるし、干寶と通婚もしている。累世召されては斷り、又召されては斷り、永嘉の頃より元嘉の頃に至るまで百餘年、「隱士の家柄」を保っている。法賜の場合、曾祖・祖・父と三代にわたつて一度も官に就いていないのに、そのはじめ州の主簿に召され、秀才に擧げられる、ということとは結局固定した家格が隱士たる名によつて保持されていたことを意味する。だからもし法賜の代に隱士を切りあげて就官すれば、それはそれで當り前の貴族のすべり出しが可能であつた。法賜はそれを斷つて「隱士」を撰擇したので、今度は隱士向きの官が名目として與えられたのである。

前に擧げた周續之は父の名も傳わらず、過江以後貴族として何らの基盤も持たない存在の家に出身したが、後に兄の子が續之の風を受け

つぎつと晉安内史に升つてゐるのは、續之の名聲によるところが大きいつつと思われる（續之には子無し）。宋炳・孔淳之の場合も本人の名聲が一族子弟の位置に利を與えている。王弘之の場合も本人の名聲が之は瑯琊王氏の出には違ひないが、傍系に屬し、祖は中書郎、父は上虞令に終つてゐる。本人も始めは家格相應の官を歴任したが、途中で會稽に隱れ、隱士として世に處した。その後、九九ページに引いた様に招隱の風に乗つて、次々に隱士向きの官を授けられ、結局隱士として一生を終えてゐる。その子曇生はすぐれた資質の持ち主ではあつたが、吏部尙書にまで升つてゐるのは父の名聲が築いた土臺の効用を考へなければならぬだろう。

陶淵明の場合、もしそれを受けつぐべき子弟がいたら、淵明の得た名聲は利とせられたことであらう。然し、殘された五人の子はすべて白痴に近い凡くらであつた。「責子」は歸隱數年後の作だが、「天運苟も此くの如くんば、且く杯中の物を進めん」というその歎きはまことに察するに餘りある。

## 結 語

以上、晉末宋初の貴族社會の中から、陶淵明と顔延之との出会いと陶淵明の隱逸の意味を考へてみた。

今日、陶淵明と言へば誰でも、菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る<sup>(1)</sup>、孤高の士を思い浮かべる。それほどにその人間像は強く固定化されていると言えよう。これは、その傳記資料や作品の表面に強く出ている印象から惹き起されたものであるが、これが一旦固定化されると、傳記資料なり作品の底にうかがわれる別の面に接する時に、先入觀念としてはたらいいて、その面の言動を不可解とし、甚だし

くはその事象を誤りと見做す傾きがある。又は全ての作品・傳記資料を一つの固定觀念で掩い盡し、寓意を見出そうとしたり、穿鑿や附會を施そうとする傾きも出てくる。

杜甫・蘇軾・朱熹など、その方向がどちらに向くかはともかく、陶淵明の「淵明らしからぬ」面に注意する説も古くあり、又近頃は現實主義の面からの評價もしきりに唱えられるけれども、大勢としての陶淵明觀はそれほど變つてはいないように思う。

たとえば、第五章で引用したついでに例に引くのだが、「示周・祖・謝三郎」詩に於いて鈴木博士は、「題の示の字になづみて結の二句を『われは足下等に教へてやらん、我が高潔なる許由の隠れ場所たる瀨水の濱に來りて我に従へ』と解するは宜しからず。かかる言を爲しては淵明の人物わるく傲岸なること甚し」(圈點は私)と述べて居られる。強い先入觀がうかがわれる。私は、本小論で述べた如く、この詩は淵明として何ら不思議なものと思わず、傲岸などとは思わないが、この詩よりもしそのような感じを受けるとすれば、寧ろそちらの方向に淵明を考へて見ることはできないだろうか。またこれに類することがかなりあるのではなからうか。

小論の見方は、既成の淵明觀よりすれば、甚だ意地の悪いものとなるかもしれないが、これによつて淵明の人物を悪く見るのではなく、當時に當り前の姿を見ようとするものである。要するに當時の隠士は決して消極的な世捨人ではない。一つの社會的な地位として見るべきものである。そしてこれは當時の社會も承認し、本人もそのつもりになつてゐるものなのである。

かかる見方からすれば、その隱逸の生活をうたう詩なども、對社會的な意味を加へて鑑賞しなければならぬ。そのまま事實としたり、

すべてを感懐の表白としたりするのは早呑み込みとなる。その間には誇張もあるうし、遊戯性もある可能性がある。たとえば「述酒」という詩は由來難解な詩とされ、大方はこれを、「隱微な表現の下に劉裕が晉恭帝を弑したことを諷刺したもの」とする(陶澗などの説)<sup>(4)</sup>。然し、近時これに對し、これは要するに酒の隱語詩だとする説(羅根澤の説)が出て、非常にすっきりしたように思う。淵明全般に對する評價はともかく、この詩については「述酒」という題名もなるほどと了解される。すると一種の遊戯的な詩となり、これに色々附會するのは無意味となる。また、「擬古」とか「雜詩」とかの題の下の詩は、基づくものがあつての作と見るべき可能性が強い。一例を挙げれば、「擬古其八」に

少時壯且厲

撫劍獨行遊

誰言行遊近

張掖至幽州

……………

少時壯且つ厲

劍を撫して獨り行遊す

誰か言はん行遊近しと

張掖より幽州に至る

という句がある。これをそのまま讀めば、淵明は若い時、劍を撫して張掖(甘肅省)から幽州(河北省)へと行遊したことが思われるが、當時この地方は北魏の版圖内であるという事實に照して、淵明が行けたはずもなく、従つてこの詩は淵明の體驗を述べるものではないということになる。ひいては擬古詩全體についても、その可能性が考えられてくるわけである。「乞食」や「怨詩楚調」なども題名からしてこれをそのまま皆事實として受けとるのは問題があると思う。

そして、これらの詩を事實を述べるものとして鑑賞する場合と、事實ではないとすると何をうたおうとしたのか、詩の意味するものは何

かと考へて鑑賞する場合とは、その評價のしかたに自から差異を生ずるのである。このような考慮なしに、詩句のあちこちを拾い出して陶淵明の人物なり思想なりを論ずるのは無意味な場合が起つてくると思ふ。

今日残る作品に見られるすばらしき、偉大さは、前述の固定觀念を除き去つたところでの評價でなければならぬと思ふが、大問題でもあり今後の課題として、今はごく大雑把な見通しとして、陶淵明の特點は、隱士としての處世をすぐれた感覺で詩にうたい上げたところにあると見る。言い換えれば、隱士にして詩人であることを主張した人物の最初に位置するものであった。思へば、鍾嶸の詩品にも「豈直爲田家語耶、古今隱逸詩人之宗也」と言うではないか。要するに陶淵明の文學の偉大さは、當時の文學觀に密着したところで認識されねばならないと思ふ。

註(1) 淵明の「晉故征西大將軍長史孟府君傳」に、孟嘉が陶侃の第十女を娶り、且つ淵明の母は孟嘉の第四女だとある。

(2) その端的な例、晉書八十四王恭傳、「起家佐著作郎、歎曰、仕宦不爲宰相、才志何足以騁、因以疾辭、俄爲秘書丞」といふ。これに類する話は枚擧にいとまがない。

(3) 「始作鎮軍參軍經曲阿」詩によつてそれが知られる。

(4) 晉書七十五王述傳、「初述家貧、求試宛陵令、頗受贈遺」、同八十二孫盛傳、「起家佐著作郎、以家貧親老、求爲小邑、出補劉陽令」など枚擧にいとまがない。

(5) 梁啓超や古直の説では年令を十一歳引き下げるが、すると起家したのが二十歳前になり、當時の實情に合わない。其の他検討すべき點があり、なお舊説を覆す妥當性を見出し得ない。

(6) 拙稿「謝安と會稽の游」八東京支那學報第六號所収に少しく論じ

た。

(7) 續世説、「隋時、杜淹與韋嗣昌爲莫逆之交、相與謀曰、上好嘉遁、蘇威以幽人見徵、擢居美職、遂共入太白山中、揚言隱逸、實欲邀求時譽、隋文帝聞而惡之、謫戍江表」。

(8) 宋書九十三王素傳、「世祖即位、欲搜揚隱逸、下詔曰、……同雷次宗傳、(元嘉二十五年)詔曰、前新除給事中雷次宗、篤尚希古、經行明脩、自絕招命、守志隱約、宜加引引以旌退素、可散騎侍郎、後又徵詣京邑、爲築室於鍾山西巖下、謂之招隱館」。

(9) 「弘之(元嘉)四年卒、時年六十三、顏延之欲爲作誄、書與弘之子曇生曰、君家高世之節、有識歸重、豫染豪翰、所應載述、況僕託慕末風、竊以敏德爲事、但恨短筆不足書美、誄竟不就」。これは顏延之の王弘に對する感情とともに、陶淵明の誄を書いたことの意味を考えさせる材料となる。

(10) 清張潮・卓爾堪・張師同閱八曹・陶・謝三家詩、陶集√卷二、「詩似有冷譏、然曰念我意中人、又曰思與爾爲鄰、語意真切、又不似譏諷」。

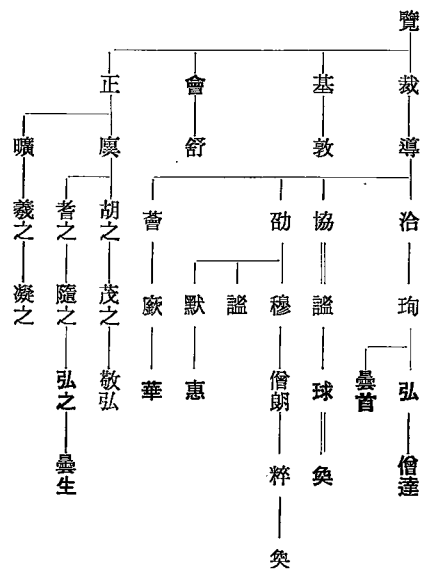
ハ中華書局、陶淵明詩文彙評による√  
(11) 晉書二十四職官志に、「著作郎一人謂之大著作郎、專掌史任、又置佐著作郎八人」とある。晉書九十二李充傳には李充が大著作となつたことが記されるが、單に著作郎と言つた時は佐著作郎を指すものらしい。尙、宋以後は著作佐郎と言つたと職官志にあるが、晉書などでは混用してゐる。宮崎市定「九品官人法の研究」二四〇頁、五七三頁参照。

(12) 前項「九品官人法の研究」二四〇頁参照。

(13) 宋書四十二王弘傳、「弘少好學、以清恬知名、……(父)珣頗好積聚、……珣薨、弘悉燔燒券書、一不收責、餘營業悉以委付諸弟」。

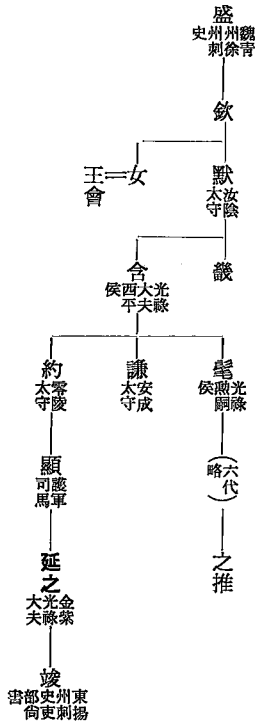
(14) 「采菊東籬下、悠然見南山」ハ飲酒其五√この有名な二句について、蘇軾が「望南山」をしりぞけて「見南山」としてより、今や異論のさしはさむ餘地がないほど、淵明の高い境地を示すものとして、固定さ

△瑯琊王氏略譜▽



附圖

△瑯琊顏氏譜▽



れているが、本来は次のような意味のものではなかったろうか。すなわち、「采菊東籬下」は王瑤が指摘するまでもなく、「陶淵明集」一九五六年、作家出版社刊、六三ページ）、菊を食って延年をはかる當時の風習を言うもので、しかるが故に長壽の象徴としての南山を「望」むのである。更に、吉川幸次郎博士が「悠然」は「南山」にかかる可能性を指摘して居られる（「陶淵明傳」昭和三十一年、新潮社刊、六二〜三ページ）が、そうすれば尙更この句の意味がはつきりしてくる。つまり、「延年の薬である菊を東籬の下に采り、かの壽ながき悠然たる南山を望んで、その境地をしたう」と。陶淵明の金看板の如く後世の讀者が思いこんでいるこの二句の模糊たる詩境は、實は作者の關知しないものである可能性が大きい。

(5) 「陶淵明詩的人民性和藝術性」△古典文學研究彙刊第一輯、上海古典文學出版社▽。

陶淵明の隱逸について